

2026 年 2 月 14 日（土）オンライン研究会のお知らせ

以下のプログラムで、2026 年 2 月 14 日（土）にオンライン（Zoom）にて研究会を実施します。この研究会は、日本中国語学会 2025 年度第 7 回研究例会の場を借りての開催です。

<https://ssl.xrea.com/www.chilin.jp/event/reikai.html>

参加用の Zoom 情報は、日本中国語学会会員の方々は、「日本中国語学会オンライン会員情報管理システム（clara）」を通して開催 1 週間前ごろにメールで配信されます。

日本中国語学会の会員ではない方々は、参加を希望される場合、日本中国語学会研究例会担当・西香織先生（関東支部／明治学院大学）に参加用の Zoom 情報をお問い合わせください。よろしくお願いいたします。

問い合わせ先：nishik◆gen.meijigakuin.ac.jp（◆を@に置き換えてください。）

中国語教育のための応用中国語学をめざして

日時 2026 年 2 月 14 日（土）13:00-15:35

場所 日本中国語学会 2025 年度第 7 回研究例会（オンライン開催）

研究会の趣旨

中国語教育界が発展するには、「どう学ぶか/どう教えるか」だけでなく「何を学ぶか/何を教えるか」についての研究蓄積も不可欠です。そのため、私たちは、何をどう学ぶか/どう教えるかに焦点をあて、日本語教育文法の研究動向にも目配りしながら、共同研究を推進中です*。

*科研課題 23K21955 「ユーザー中心設計による中国語教育文法の構築—事例研究からの実用化と体系化—」

今回の研究会では、さらに、日本語学・日本語教育・国語教育の各領域に精通しインパクトの強い研究成果を発信している森篤嗣氏をお招きしました。中国語教育従事者にとって、中国語教育の隣接分野でありながらも、ふだん接する機会が多いわけではない分野の「ここだけの話」を打ち明けてもらいたいと考えています。

プログラム

13:00-13:10 あいさつ・主旨説明 鈴木慶夏（神奈川大学）

13:10-14:10 【特別講演】

森篤嗣（武庫川女子大学）https://researchmap.jp/MORI_Atsumushi

文法・語彙項目の精選と最適化

一言語学の「オマケ」からの脱却—

14:10-14:20 質疑応答

14:20-14:30 休憩

14:30-14:55 西香織（明治学院大学）

中国語教育文法は何を目指すのか

一言語学と教育学の「ハザマ」から—

14:55-15:20 建石 始（神戸女学院大学）

中国語学習者から見た中国語初級文法
—中国語教育と日本語教育が「ナカマ」に—

15:20-15:30 質疑応答

15:30-15:35 あいさつ等 鈴木慶夏（神奈川大学）

発表要旨

森篤嗣（武庫川女子大学）

文法・語彙項目の精選と最適化 —言語学の「オマケ」からの脱却—

言語教育において「どうやって教えるか」と同じかそれ以上に、「何を教えるか」は重要である。「何」に当たる文法・語彙項目については、言語学で研究されるものだという意見もあるが、言語教育学は「教えるときどう扱うべきか」に重きを置くべきである。2000 年以降、私たちは「日本語教育文法」という枠組みで進めてきた。そこには三つのポイントがあった。一つ目はコーパスの登場、二つ目はノンネイティブ研究者との共同、そして三つ目が言語学の「オマケ」からの脱却である。「日本語学の研究は結果として教育にも役立つ」という楽観論は、日本語学と日本語教育の乖離を生んだ。「教えるための項目の精選と最適化」はそれに抗う術である。

西香織（明治学院大学）

中国語教育文法は何を目指すのか —言語学と教育学の「ハザマ」から—

中国語教育は従来、中国語学の体系を教育に応用する周辺の領域として扱われてきた。とりわけ近年は授業ツールへの関心が高まる一方、何をどの段階でどのように教えるかという中国語教育学の本質的課題が後景化している現状がある。われわれは、学習者が具体的場面で適切に運用できるよう項目を再編した体系を「中国語教育文法」と呼び、その構築を進めてきたが、各分野から大きな関心を得るには至っていない。その背景には、中国語学と中国語教育学の乖離だけでなく、両者を結ぶ中間領域を十分に位置づけてこなかったことがあるのではないかと。本発表では、この「ハザマ」にある課題を整理し、中国語教育文法が目指すべき原理と方法を提示したい。

建石 始（神戸女学院大学）

中国語学習者から見た中国語初級文法 —中国語教育と日本語教育が「ナカマ」に—

本発表は、日本語学・日本語教育学が専門であり、中国語学習者でもある発表者が中国語初級文法について考えるものである。2000 年代に入るまでの日本語教育においては、日本語をどう教えるかについては盛んに議論されていたが、何を教えるのかについてはあまり議論されてこなかった。また、当時の日本語教育の文法教育観やシラバスの設計理念は、日本語学の視点に大きく依存していた。そのような状況のもと、初級文法シラバスをどう作成するのかということを中心に日本語教育文法が提唱され、数多くの成果が提示されている。日本語教育文法が提唱され始めて 20 年以上が経過したが、その成果を検討しながら中国語初級文法について考えてみたい。